

幼稚園教育要領と幼稚園教育要領解説に関する 計量的内容分析 —「遊び」に着目した探索的研究—

清水 将之

(2017年9月15日受理)

要 旨

本研究は幼稚園教育要領や幼稚園教育要領解説において、何が示され何が語られているのか、幼稚園教育要領と幼稚園教育要領解説の全文を対象として分析を行う。なお、分析にあたっては、テキストマイニングを採用し探索的に検討を試みた。その上で、これらの中で「遊び」に着目し、「遊び」が本質的にどのように扱われているのか、視覚的に構造化することにより、これらの位置づけや関連性について検討を試みた。

その結果、次のことが明らかになった。

- ① 幼稚園教育要領は「幼児」「生活」「活動」「自分」「行う」を中心に語が出現し、幼稚園教育要領解説で「幼児」「教師」「大切」「生活」「活動」を中心として語が出現する。
- ② 「遊び」の出現回数は幼稚園教育要領で10回、幼稚園教育要領解説で211回、「運動」の出現回数は幼稚園教育要領で1回、幼稚園教育要領解説で12回であった。
- ③ 「遊び」については「運動」とらわれないこと、また、幼稚園教育要領や幼稚園教育要領解説において「運動」そのものの取扱いが小さいことが明らかとなった。

キーワード 遊び、幼稚園教育要領、幼稚園教育要領解説、テキストマイニング、領域

I 緒言

1

幼稚園教育における教育の淵源となる幼稚園教育要領は、2017（平成29）年3月30日に改訂され、2018（平成30）年より適用される（これは保育所保育指針についても同様である）。幼稚園教育要領は、当時の文部省から1956（昭和31）年に試案として作成された^(注1)。そして、1964（昭和39年）に公告化され、これ以降の1989（平成元年）、1998（平成10）年、2008（平成20）年の改訂を経て現在に至っている。これらの改訂の流れの中、1989年の

改訂において、領域がそれまでの6領域から5領域に再編された。これは、「小学校教育での教科に準じている、それとまぎらわしい、などといった誤解を含めての批判にも対応するものとしての新たな視点からの組み立てであった。」と指摘している¹⁾。しかし、小学校教育における教科と幼稚園教育における領域の解釈上の混濁は、1956年に試案的に幼稚園教育要領が刊行された時点で伺える。

1956年に試案的に刊行された幼稚園教育要領は、「小学校との一貫性」という点に配慮されている^{2) 3)}。この6領域の設定は、第二章 幼稚園教育の内容で「(略) 指導計画を立案するための便宜からしたものである。」と示している。指導計画の作成や立案という視点が明らかにされながらも、「小学校以上の学校における教科とは、その性格を大いに異にしている。(略) 小学校の教科指導の計画や方法を、そのまま幼稚園に適用したら、幼児の教育を誤る結果となる。」⁴⁾と指摘しているのである。

小学校の教育課程における教科に該当するものは、保育所や幼稚園には見当たらない。保育所は保育所保育指針に準拠した保育課程、幼稚園は幼稚園教育要領に準拠した教育課程を設定する^(注2)。3歳以上の保育や教育において、「とりわけ4歳および5歳の保育内容や教育内容は、幼稚園教育要領に順じ行われることが望ましい」とされている⁵⁾。この点について、保育所における保育は「養護と教育が一体化」したものであり、幼稚園における「教育」との共通性という内容で一般的に理解され、保育所保育指針では「保育内容」、幼稚園教育要領では「領域」として取り扱われている。そして、保育所保育指針や幼稚園教育要領では、「環境を通じた保育や教育」や「遊びを通しての指導」が明示されている(本研究の中心は「幼稚園教育要領」と「幼稚園教育要領解説」のため、これ以降、これらを中心に論を展開することとする)。これは、1989年に幼稚園教育要領が改訂された際に、「幼稚園教育は環境を通して行うものであることが幼稚園教育の基本である」ことが明示されたからである。また、「遊びを通しての指導を中心として幼稚園教育のねらいが総合的に達成されるようにすること」とされている^{6) 7)}。つまり、「遊び」を幼稚園教育の中心に据え置き、これを「領域」を通して総合的に達成することを提示しているのである。この「幼稚園教育は環境を通して行うものである」という点は、1998年、2008年の改訂においても引き続き継承されている。「遊び」についても同様であり、1998年の改訂では「遊びを中心とした生活を通して、一人一人に応じた総合的な指導を行うという幼稚園教育の基本的考え方を引き続き充実発展される」、2008年の改訂では「近年の子どもたちの育ちの変化に対応し、発達や学びの連続性及び幼稚園での生活と家庭での生活の連続性を確保し、計画的に環境を構成することを通じて、幼児の健やかな成長を促す」としている。幼稚園における教育は家庭等における生活の延長線上にある営みであり、幼稚園における「遊び」の充実から、家庭生活における「遊び」の連続性までを取り上げているのである⁸⁾。背景にある子どもを取り巻く社会環境の激変から、「遊び」の喪失に対する危機感であり、結果的に子どもの体力低下を惹起させたことに対する危機感と受け取れる。つまり、「遊び」の時間や環境(量的・質的)をいかに確保するかが課題となっていたわけである。しかし、その課題に対するアプローチは量的な問題である「体力をどう向上させるか」「運動量をどう確保するか」を中心に遷移してしまったと

考えられる。この遷移してしまった点を、運動学の碩学である小林寛道や幼児教育研究の第一人者である無藤 隆の言説が参考になるだろう。

小林寛道は幼児期の「運動指導のあり方」について、1989年に領域がそれまでの6領域から5領域に再編された幼稚園教育要領の改訂の際に次のように述べている。「(略) もっと自由な形で運動指導が行われ、子どもたちがあまり窮屈にならずに、授業という形態とは離れた遊びという範ちゅう(ママ)の中で、身体活動に関する教育が行う事ができないものであろうか、という問いかけが、新しい『幼稚園教育要領』の趣旨ではないかと思われます。」と述べている⁹⁾。しかし、幼児の自発的な遊び運動が取り込まれる環境が喪失していることに言及し、「運動指導」や「体育指導」は補完的役割を果たしていることも指摘している。これに加え、不活動な子どもへの指導のあり方として、「先生が子どもに運動を教えるのではなく、一緒に遊ぶという姿勢が何よりも効果的なのではないでしょうか。」¹⁰⁾とも述べている。これは、「遊び」を展開する上での根本的な重要性を持つ指摘と言える。

無藤 隆は「保育内容における運動の取扱い」について、運動量を上げることや全身運動の必要性とともに、「強さ」「多様性」「しなやか」の3つを挙げている。また、特に総体としての運動指導について、「個別の運動の時間とか体操の時間を設けるよりは、子どもがさまざまな動きをせざるを得ないような道具とか場面を用意します。」¹¹⁾と述べている。無藤 隆も運動量を上げることや全身運動の必要性を述べつつ、子どもの多様な動きが行えるような教師による環境構成が必要であることを言及している。これは、2008年の幼稚園教育要領の改訂を受けてのものである^(注3)。

小林寛道や無藤 隆も「遊び」とそれに係る「運動」や「指導」の問題点を明晰に浮かび上がらせている。

そこで、本研究は幼稚園教育要領や幼稚園教育要領解説において、何が示され何が語られているのか、幼稚園教育要領と幼稚園教育要領解説の全文を対象として分析を行う。なお、分析にあたっては、テキストマイニングを採用し探索的に検討を試みる¹²⁾。その上で、これらの中で「遊び」に着目し、「遊び」が本質的にどのように扱われているのか、視覚的に構造化することにより、位置づけや関連性について検討を試みた。

その結果、若干の知見を得たので、ここに報告する。

II 先行研究の検討

テキストマイニングを分析手法とした研究は、近年増加しつつある。CiNii(国立情報学研究所が運営する学術情報データベース)の論文検索では2,215件が該当する(2017年7月1日現在)。そのうち、保育学や幼児教育分野におけるテキストマイニングを用いた研究はまだ少ない。例えば、検索語「テキストマイニング+保育」で35件、「テキストマイニング+幼稚園」で9件、「テキストマイニング+保育所」で1件が該当する(検索結果には重複したものが含まれている)。特に、幼稚園教育要領や幼稚園教育解説そのものを計量的テキスト分析によって検討を試みたものは見当たらない。

他分野では、法令文や法律文をテキストマイニングの手法を用いて分析する試みが蓄積されつつある。小川泰弘、中村 誠、外山勝彦は、国立印刷局が運営する「官報情報検索サービス」を利用し、日本国憲法施行後から現在（2012年）までに制定された法律を対象として、約9,300万文字という膨大なテキストデータをマイニングしている¹³⁾。法律に出現する単語の頻度から法律の制定状況を分析している。その他に、下高原理恵、李 慧瑛、西本大策、峰 和治、緒方重光は、D財団の健康増進に関する公募研究論文（1,041編）を縦断的にテキストマイニングを行っている¹⁴⁾。健康に関する研究テーマの変遷は、健康増進の施策の変化を反映していた。

これらのことから、本研究では幼稚園教育要領と幼稚園教育要領解説の全文を対象としてテキストマイニングの手法が有用であると判断し、分析を行うこととする。

Ⅲ 分析方法

テキストマイニングとは、テキスト形式のデータマイニングのことである。膨大なテキストデータの分析には、客観性の担保や恣意性の排除が重要である。客観性や恣意性を排除する一つの方法がテキストマイニングの手法である。テキストマイニングは「大量のデータから属性やデータ間に成り立つ規則性を高速に発見すること。知識を自動的に抽出することだけが目的ではなく、膨大なテキストデータからどのような性質を持っているかをユーザーに提示できる仕組みである」¹⁵⁾。

本研究の分析対象の概要は以下の通りである。

(1) 幼稚園教育要領

改訂：2008年3月28日

適用：2009年4月1日

(2) 幼稚園教育要領解説

刊行：2008年7月

一部修正：2008年11月14日

(3) 分析手法

幼稚園教育要領ならびに幼稚園教育要領解説の頻出語、共起ネットワーク分析、多次元尺度構成法に基づき視覚的に構造化する。

(4) 倫理的配慮

本研究の内容分析の対象である幼稚園教育要領、幼稚園教育要領は公開されている文書である。従って、本研究は文献研究に該当する。よって、人を対象とした研究に適用される倫理的配慮事項は生じない。しかし、奥付に記載された、執筆者の氏名および所属機関名の固有の情報を保護する。

IV 分析結果

(1) 幼稚園教育要領

KH Corderの前処理¹⁶⁾を実施した。文章の単純集計の結果から、総抽出語数6,166（使用数2,598）、異なり語数は737（使用数588）であった。

① 頻出語

頻出上位150語は表1に示した。上位5位は、「幼児」(93)、「生活」(48)、「活動」(32)、「自分」(29)、「行う」(25)であった。なお、「遊び」の出現回数は10であった。なお、「運動」は1であり、上位150語には入っていなかった。

② 共起ネットワーク

共起ネットワークは図1に示した。幼稚園教育要領を構成するそれぞれの語の出現パターンが類似した語（すなわち共起の程度が強い語）を線で結んだネットワークを描写し視覚的に構造化した。なお、各要素間の関連性（つまりクラスター）を確認するために「サブグラフ検出・媒介」¹⁷⁾を選択した。なお、出現数の多い語ほど大きい円、強い共起関係ほど太い線で描写される。同じサブグラフ（つまりコミュニティ）¹⁸⁾に含まれるものは実線で結ばれ、互いに異なるコミュニティに含まれる語は破線で結ばれる。コミュニティごとに色分けがされている。

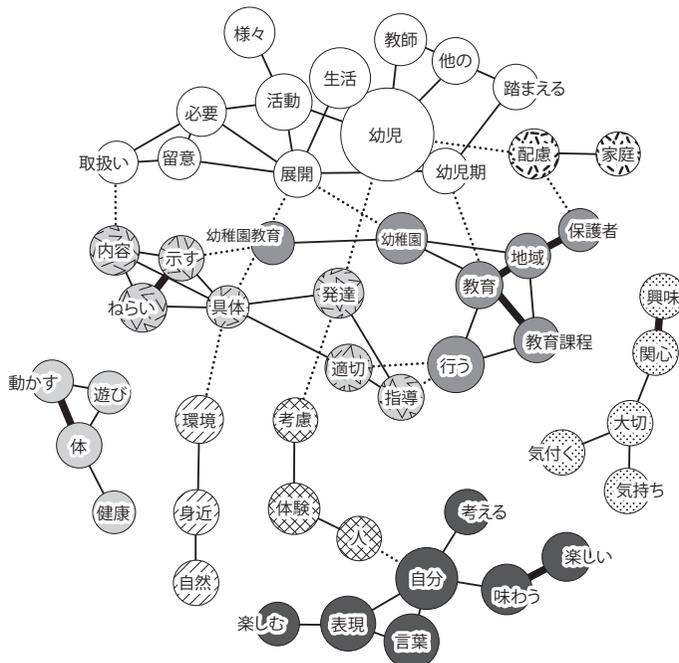


図1 共起ネットワーク（幼稚園教育要領）

表1 幼稚園教育要領における頻出上位150語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
幼児	93	取扱い	10	身	6
生活	48	保護者	10	設ける	6
活動	32	友達	10	全体	6
自分	29	遊び	10	相手	6
行う	25	幼稚園教育	10	促す	6
言葉	23	力	10	多様	6
表現	23	育てる	9	得る	6
教師	20	応じる	9	日常生活	6
様々	20	喜び	9	美しい	6
体験	19	係る	9	分かる	6
発達	19	工夫	9	イメージ	5
必要	19	指導計画	9	リズム	5
味わう	19	事項	9	感じる	5
幼稚園	19	自ら	9	関連	5
内容	18	心	9	自己	5
配慮	18	図る	9	上記	5
楽しい	17	達成	9	人々	5
ねらい	16	伝える	9	生活経験	5
環境	16	特に	9	先生	5
関心	15	幼稚園生活	9	相互	5
教育	15	養う	9	入園	5
興味	15	連携	9	変化	5
適切	15	育つ	8	目的	5
展開	15	時間	8	話	5
豊か	15	付ける	8	援助	4
行動	14	聞く	8	学校教育法	4
指導	14	いろいろ	7	感覚	4
他の	14	安全	7	感情	4
地域	14	意欲	7	感性	4
気付く	13	基礎	7	基盤	4
教育課程	13	基本	7	及ぶ	4
考える	13	機会	7	形成	4
自然	13	作成	7	構成	4
身近	13	主体	7	行事	4
人	13	心身	7	事象	4
体	13	深める	7	周囲	4
踏まえる	13	親しみ	7	習慣	4
幼児期	13	培う	7	集団	4
楽しむ	12	文字	7	充実感	4
考慮	12	遊ぶ	7	重要	4
示す	12	領域	7	進む	4
大切	12	過程	6	数量	4
留意	12	基づく	6	総合	4
家庭	11	教育活動	6	即す	4
気持ち	11	使う	6	態度	4
十分	11	次第に	6	努める	4
親しむ	11	実態	6	発揮	4
動かす	11	終了後	6	遊具	4
具体	10	場合	6	理解	4
健康	10	触れる	6	留意事項	4

10回以上出現していた56種類について着目すると、その間には876の共起関係が見られた。そのうちJaccard係数¹⁹⁾が大きい順に70の共起関係を線 (edge) として描写した。最小のJaccard係数は0.173であった。3語以上の結びつきのあるコミュニティは8であった。中心軸は「幼児」や「生活」である。「活動」が結節点となり「様々-展開-必要」と結びついている。「展開」も結節点となり「活動-必要-留意」と結びついている。主な結びつきとして「行う-教育-地域-保護者」「ねらい-内容-示す-具体」「自分-表現-楽しむ」などが見られた。「遊び」については「体-動かす-健康」との結びつきが見られた。

③ 多次元尺度構成法

多次元尺度構成法 (MDS)²⁰⁾ を用いた散布図は図2に示した。幼稚園教育要領を構成するそれぞれの語が、どのような関係性をもって出現しているかについて示したものである。

中心に位置するものは「幼児」「生活」「体験」「活動」である。中心に対し周縁に位置するものは、1次元または2次元の外れ値であり中心に位置する語と比較して、やや孤立している語である。周縁に位置するものは「動かす」「体」「遊び」や「保護者」である。中心に位置する語である「幼児」「生活」「体験」「活動」は幼稚園教育における基本となるものである。また、「教師」「発達」「考慮」「展開」が中心に位置する語に近接していることが伺える。「遊び」については周縁で出現し、「保護者」も周縁で出現している。

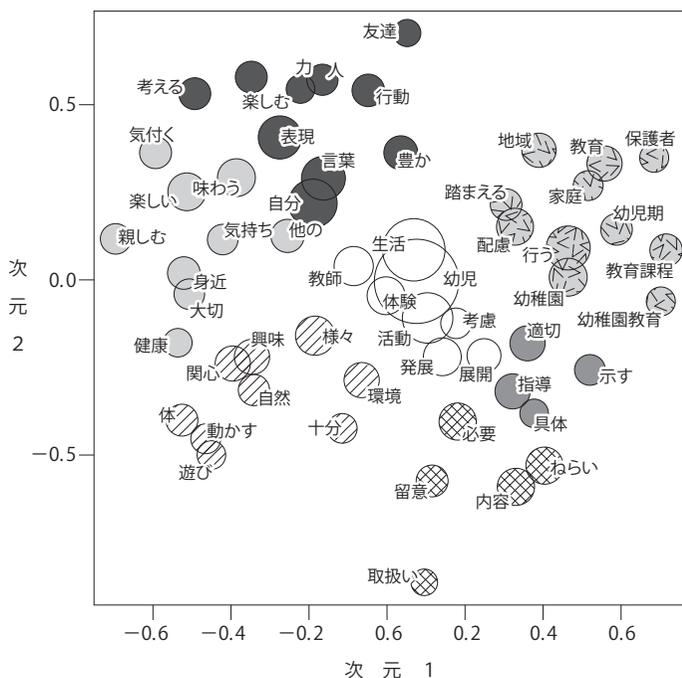


図2 多元尺度構成法 (幼稚園教育要領)

(2) 幼稚園教育要領解説

KH Corderの前処理の結果から、総抽出語数80,871（使用数31,824）、異なり語数は2,700（使用数2,271）であった。

① 頻出語

頻出上位150語は表2に示した。上位5位は「幼児」(1,582)、「教師」(494)、「大切」(440)、「生活」(425)、「活動」(385)であった。なお、「遊び」の出現回数は211であった。なお、「運動」は12であり、上位150語には入っていなかった。

② 共起ネットワーク

共起ネットワークは図3に示した。幼稚園教育要領解説を構成するそれぞれの語の出現パターンが類似した語（すなわち共起の程度が強い語）を線で結んだネットワークを描写し視覚的に構造化した。なお、各要素間の関連性（つまりクラスター）を確認するために「サブグラフ検出・媒介」を選択した。なお、同じサブグラフ（つまりコミュニティ）に含まれるものは実線で結ばれる。

25回以上出現していた213種類について着目すると、その間には14,135の共起関係が見られた。そのうちJaccard係数が大きい順に50の共起関係を線（edge）として描写した。最小のJaccard係数は0.206であった。

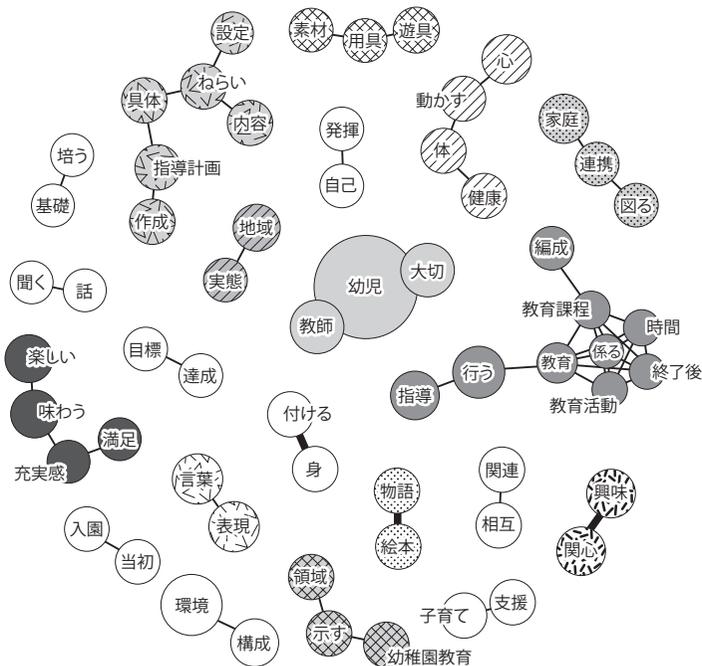


図3 共起ネットワーク（幼稚園教育要領解説）

表2 幼稚園教育要領解説書における頻出上位150語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
幼児	1582	意味	83	自己	52
教師	494	適切	83	力	52
大切	440	伝える	83	場	51
生活	425	人	82	身近	51
活動	385	味わう	82	遊具	51
環境	359	感じる	81	仕方	50
必要	346	楽しむ	80	動き	50
自分	333	一緒	78	得る	50
幼稚園	270	集団	77	いろいろ	49
発達	265	見る	76	過程	49
体験	233	工夫	76	喜び	49
遊び	211	配慮	76	小学校	49
友達	208	時間	74	多様	49
行う	199	示す	74	踏まえる	49
様々	194	状況	73	基づく	48
表現	169	他の	71	基本	48
教育	160	時期	70	作成	48
言葉	154	保護者	70	入園	48
理解	152	特に	68	深める	47
興味	144	ねらい	66	安全	45
考える	143	イメージ	66	健康	45
指導	143	思い	66	多い	45
展開	143	育てる	65	係る	44
関心	139	指導計画	65	変化	44
気持ち	139	体	65	考慮	43
心	138	動かす	65	基礎	42
行動	130	異なる	64	評価	42
応じる	124	触れる	64	物	42
重要	122	図る	64	計画	41
家庭	116	保育	64	実態	41
構成	116	思う	62	促す	41
十分	114	役割	62	特性	41
幼稚園生活	113	意欲	61	子育て	40
教育課程	112	主体	61	実現	40
楽しい	110	取り組む	61	培う	40
自然	109	連携	60	流れ	40
気付く	101	使う	57	話	40
地域	100	受け止める	57	充実	39
遊ぶ	98	全体	57	人々	38
援助	97	付ける	56	発揮	38
内容	97	聞く	56	編成	38
幼児期	97	機会	55	出会う	37
経験	94	教育活動	55	満足	37
場合	91	次第に	55	関係	36
幼稚園教育	91	自ら	55	態度	36
豊か	90	周囲	55	守る	35
姿	87	身	54	充実感	35
具体	86	領域	54	場面	35
相手	86	分かる	53	素材	35
それぞれ	84	文字	53	存在	35

21のコミュニティとその共起関係が存在する語が見られた。そのうち、3語以上の共起関係のあるコミュニティは8であった。中心軸は「幼児」「教師」「大切」である。非常に強い結びつきが見られた。主な結びつきとして「時間－教育活動－教育課程」「ねらい－具体－指導計画－作成」などが見られた。

次に「遊び」を中心軸にして分析を行い図4に示した。1,385の共起関係が見られた。そのうち、Jaccard係数が大きい順に60の共起関係を線(edge)として描写した。最小のJaccard係数は0.182であった。同じサブグラフ(つまりコミュニティ)に含まれるものは実線で結ばれる。互いに異なるコミュニティに含まれる語は破線で結ばれる。共起関係が強いものを太線、出現数の多い語ほど大きい円で描写した。

10のコミュニティとその共起関係が存在する語が見られた。そのうち、3語以上の共起関係のあるコミュニティは7であった。

「遊び」を中心して分析をすると、4語のコミュニティとなり「幼児」「生活」「様々」と結びついている。最も結びつきの多いものは13語の結びつきがあり、「体」のコミュニティである。「動かす」を結節点として「味わう－満足－意欲」と結びつき、「安全」を結節点として「場所－行動」と結びついている。また、「安全」は他のコミュニティとの結びつきが見られ、「危険」と結びついている。「安定」のコミュニティは10語の結びつきがあり、「分かる－特に－危険」と結びついている。「物」のコミュニティは10語の結びつきがあり、「性

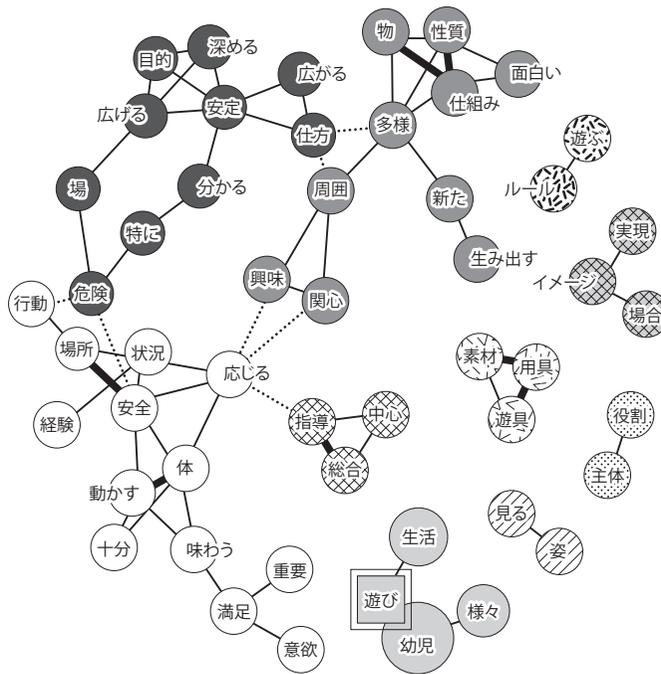


図4 共起ネットワーク(「遊び」：幼稚園教育要領解説)

③ 多次元尺度構成法

多次元尺度構成法 (MDS) を用いた散布図は図 6 に示した。幼稚園教育要領解説を構成するそれぞれの語が、どのような関係性をもって出現しているかについて示したものである。

中心に位置する語である「幼児」「生活」「大切」「教師」「体験」「十分」「幼稚園成生活」「考える」は幼稚園教育における基本となるものである。また、「遊び」「様々」が近接している。これは、幼稚園教育要領の分析とは異なる点である。

次に、周縁に位置するものは、「ねらい」「指導計画」「地域」や「分かる」「相手」「動き」である。周縁に位置するものは 1 次元または 2 次元の外れ値であり、中心に位置する語と比較して、やや孤立している語である。

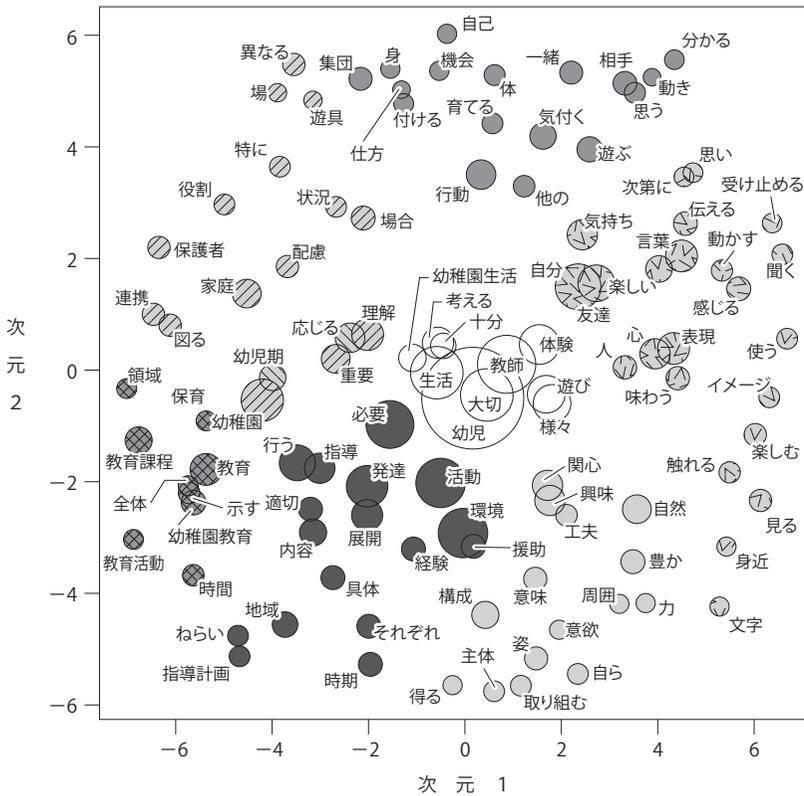


図 6 多次元尺度構成法 (幼稚園教育要領解説)

V 考察とまとめ

本研究は幼稚園教育要領や幼稚園教育要領解説をテキストマイニングすることで、何が示されて語られているのか。これらの中で「遊び」に着目し、その位置づけや関連性が明らかになった。まず、分析結果について若干の考察を試みたい。

まず、頻出語についてである。出現が高い語は、幼稚園教育要領や幼稚園教育要領で中心となる語であり、これらを中心に語られていることである。出現が高いものから、幼稚園教育要領で「幼児」「生活」「活動」「自分」「行う」であり、幼稚園教育要領解説で「幼児」「教師」「大切」「生活」「活動」である。幼稚園教育の主体は「幼児」であり、幼稚園の生活において子どもが自ら生活や活動を行う重要性が読み取れる。幼稚園教育要領解説は幼児教育に関わる対象である教師等を主に対象として執筆されたものであるが、幼稚園教育の主体である「幼児」とともに、「教師」の役割やその職務の重要性が読み取れる。また、「遊び」は幼稚園教育要領で10回出現し上位100位以内であり、幼稚園教育要領解説で211回出現し上位12位に出現する。「運動」は幼稚園教育要領で1回のみ出現し、幼稚園教育要領解説で12回の出現であった。幼稚園教育における中心は「生活」や「活動」であり、「遊び」において全体的な運動量や活動量は「運動」にとらわれないということが読み取れる。つまり、「遊び」を質的に考慮（例えば環境をどう構成するか）しながら、生活や活動の中で展開されているかということである。

次に、共起ネットワーク分析である。幼稚園教育要領では「幼児」「生活」を中心としたコミュニティが確認され、「教師」「活動」といった、日々の教育実践における中心的役割が共起関係に出現している。幼稚園教育要領解説では「幼児」を中心に「教師」「大切」が中心としたコミュニティが確認された。また、「教育」「教育課程」といったコミュニティや「ねらい」「内容」「具体」「指導計画」といったコミュニティが確認された。幼稚園教育の主体である幼児を中心として、教師との関係性の中で教育課程や具体的なねらいや内容に基づいた教育の必要性が改めて確認できるだろう。また、「遊び」を中心にして共起関係を分析すると、幼稚園教育要領解説で「幼児」「生活」「様々」を中心としたコミュニティが確認される。ここでも「運動」は共起関係に出現しない。「体」「安全」「動かす」といったコミュニティが確認でき、幼稚園の教育の内容である「領域 健康」との関連性が示唆された。また、「多様」「物」「性質」「仕組み」といったコミュニティも確認でき、幼稚園教育の内容である「領域 環境」との関連性も示唆された。独立してはいるが、「総合—指導—中心」や「素材—用具—道具」「実現—イメージ」といった結びつきも見られ、「遊び」を質的な側面からとらえる具体的な観点として捉えることができるだろう。更に、「遊び」と「遊ぶ」を中心として共起関係を分析すると、幼稚園教育要領解説で「生活」「体験」「一緒」「楽しい」といったコミュニティが確認できる。「遊び」や「遊ぶ」際に「楽しさ」や「満足感」といった、心情や意欲といったものが、具体的な「態度」に結びつくことが示唆される。つまり、「生きる力」を養うことにつながると言える。俯瞰的にみると、各領域（5領域）を構成している語が全体的に分散されて出現しているところが興味深いところである。

次に、多次元尺度構成法による分析である。中心に位置するものは、幼稚園教育要領、幼稚園教育要領解説とも頻出語や共起関係と同様である。よって、ここでは、1次元または2次元の外れ値であり中心に位置する語と比較して、やや孤立している語について検討を試みたい。幼稚園教育要領で周縁に位置するものは、「動かす」「体」「遊び」や「保護者」である。幼稚園教育要領解説で周縁に位置するものは、「ねらい」「指導計画」「地域」や「分かる」「相手」「動き」である。幼稚園教育の主体は幼児や生活、活動といったものであり、その延長線上にこれら周縁に出現する語が教育の営みの結果として、教育実践における具体的な関係性が出現すると考えられる。幼稚園の生活や活動が活発化や充実化すると、周縁に及ぶものまでが影響されると言えるのではないだろうか。つまり、幼児を中心に教師が生活や活動が活発になるような関わりや思考（保護者、指導計画）が必要になってくるのではないか。

今回の分析では、幼稚園教育要領や幼稚園教育要領解説において、そのコア（核）として語られていたものが改めて明らかになった。それは「幼児」「活動」「生活」であり、それを支える「教師」の存在である。「遊び」については「運動」にとらわれないこと、また、幼稚園教育要領や幼稚園教育要領解説において「運動」そのものの取扱いが小さいことが明らかとなった。

それではなぜ、この「遊び」において、運動量の多い遊びや身体を主に使用した遊びなどをひとくくりにして、「運動遊び」「体育遊び」と称しているのであろうか。保育用語辞典では次のように定義している。「運動遊び：走・投・跳など活発な身体活動を含む遊びで、動くことそのものを楽しみ面白さを感じる。体育遊びと呼ばれて体力向上が目的と思われた時期もあったが、幼児の体力はおとなと比較して未分化な状態にある。そのため身体を活発に動かす遊びを通し、結果的に運動技能が獲得されるという理解が重要である。また子どもがみずからすすんで取り組む意欲が生まれるような人的物的環境と整え、特定の運動に偏ることなく多様な動きの経験ができるような保育者の援助が求められる。」²¹⁾ 根本的には「遊び」の質的な問題である。また、今回の分析からも特定の「運動種目」や「運動内容」に言及した内容は見当たらないのである。

最後に河邊貴子は、次のように述べている。「運動が大切だからといって保育者やその他指導者が『運動指導』を定期的におこなったとしても、それはきっかけを用意したに過ぎません。保育者は子どもの姿から発達の様相を把握し、試行錯誤しながら活動ができる時間的なゆとりを保障したり、物的環境を整えたり、必要な援助を行ったりする必要があります。」²²⁾ 領域を適した「遊び」の指導における、根本的な重要性であることを改めて指摘しておきたい。

参考文献

- (1) Osgood, C.E. "The Representational Model and Relevant Research Methods" I. de S. Pooled. Trends in Content Analysis Urbana, IL: University of Illinois Press, 1959, 33-88.
- (2) Danowski, J. A. "Network Analysis of Message Content" W. D. Richards Jr. & G. A. Barnett eds. Progress in Communication Sciences, IV Norwood, NJ: Ablex, 1993, 197-221

- (3) 石田基広他『コーパスとテキストマイニング』共立出版、2012.
- (4) 樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版、2014.
- (5) 佐藤郁哉『質的データ分析法』新曜社、2017.
- (6) 無藤 隆、柴崎正行編『別冊発達29 新幼稚園教育要領・新保育所保育指針のすべて』ミネルヴァ書房、2009.
- (7) 小林寛道『幼児の発達運動学』ミネルヴァ書房、1990.
- (8) 無藤 隆『幼児教育の原則』ミネルヴァ書房、2009.
- (9) デビット・L・ガラヒュー著、杉原隆訳『幼少年期の体育』大修館書店、2009.
- (10) 正木健雄『子どものからだと心を科学する』合同出版、2012.
- (11) 民秋 言編『幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領の成立』(第2版) 萌文書林、2016.
- (12) 2008 幼稚園教育要領 文部科学省告示第26号
- (13) 小田 豊『幼保一体化の変遷』北大路書房、2014.
- (14) 清水将之 他編『保育内容・領域 健康』わかば社、2015.
- (15) 河邊貴子 編著『保育内容 健康』建帛社、2008.
- (16) 民秋 言 他編『保育内容 健康』北大路書房、2011.

注釈

- (注1) 1956年に試案的に幼稚園教育要領が文部省(当時)作成された。この幼稚園教育要領は実質的には、1948(昭和23)年に暫定的に発行された「保育要領」が改訂されたものである。
- (注2) 本研究で取扱う幼稚園教育要領は、2008(平成20)年改訂のものである。また、幼稚園教育要領解説も同様のものである。当時の呼称を本研究でも適用することとする。なお、2017(平成29年)改訂の保育所保育指針では、それまでの保育計画という名称から「全体的な計画」に変更された。また、これに基づいた指導計画、保健計画、食育計画等を作成する。
- (注3) 無藤 隆は、2008年に改訂された幼稚園教育要領の解説書である、幼稚園教育要領解説の作成協力者のうちの一人である。

注記

- 1) 民秋 言編『幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領の成立』(第2版) 萌文書林、2016、p6.
- 2) 1956 幼稚園教育要領 文部省、1956.
- 3) 総則等の構成に関する資料 文部科学省中央教育審議会初等中等教育部会教育課程部会幼児教育部会(第5回)配布資料 2016.
- 4) 前掲書1)および2).
- 5) 1963 幼稚園と保育所の関係について 文部省・厚生省両局長通知.
- 6) 清水将之「幼稚園教育要領における領域『健康』の変遷—保育要領と幼稚園教育要領を俯瞰して—」淑徳大学短期大学部研究紀要、No56. p.89.
- 7) 2008 幼稚園教育要領解説 文部科学省、p.244.
- 8) 前掲書1)および6).
- 9) 小林寛道『幼児の発達運動学』ミネルヴァ書房、1990、p.287-289.

- 10) 前掲書9).
- 11) 無藤 隆『幼児教育の原則』ミネルヴァ書房、2009、p.45.
- 12) テキストマイニングにあたり樋口耕一が作製し公開しているKH Coderを利用した。
- 13) 小川泰弘、中村 誠、外山勝彦「法律文中における単語出現頻度の変化：法令テキストマイニングの一例」名古屋大学法政論集、v.250、2013、p.543-555.
- 14) 下高原理恵、李 慧瑛、西本大策、峰 和治、緒方重光「健康増進に関する調査研究の歴史の変遷：ヘルスプロモーションの可視化」鹿児島大学医学部保健学科紀要27 (1)、2017、p7-17.
- 15) 長野 徹、武田浩一、那須川哲也「テキストマイニングのための情報抽出」情報学基礎60 (5)、2000、p.31-38.
- 16) 複合語の検出方法として、KH Corderに同梱されている「Term Extract」を利用した。「Term Extract」は東京大学情報基盤センター図書館電子化部門・中川研究室にて公開されている、専門用語（キーワード）自動抽出システムを利用し抽出結果を確認している。
- 17) サブグラフ：「比較的強くお互いに結びついている部分」をコミュニティとグラフ理論分野では呼称しているが、KH Corderでは暫定的に「サブグラフ」を用いて呼称している。本研究でもこれに従うこととする。樋口耕一「社会調査のための計量テキスト分析」ナカニシヤ出版、2014、p.160.
- 18) KH Corderではコミュニティをサブグラフとして置換して呼称している。グラフ理論では「コミュニティ」と呼称している。本研究では、サブグラフとコミュニティを併用して使用するが、視覚的に描写されたグラフの解釈においては「コミュニティ」を使用することとする。なお、色分けについて、背景が白色で枠線が黒で描写されたものは、他の語とコミュニティが形成されていない単独の語である。
- 19) Jaccard係数：語が共起しているかどうかを重視する係数である。類似性測定を行うものであり、0から1までの間をとる。関連性が強いものほど1に近似する（0.1：関連がある。0.2：強い関連がある。0.3：とても関連がある。）樋口耕一「社会調査のための計量テキスト分析」ナカニシヤ出版、2014、p.39.
- 20) 多次元尺度構成法（MDS：Multi Dimensional Scaling）は多変量解析の一手法であり、出現パターンの近似した語の組み合わせを探索する手段のひとつである。樋口耕一「社会調査のための計量テキスト分析」ナカニシヤ出版、2014、p.154.
- 21) 森上史朗、柏女靈峰編『保育用語辞典（第8版）』ミネルヴァ書房、2015、p77.
- 22) 河邊貴子「領域・健康」ミネルヴァ書房、p.52.